
ラビリンスで待ってて

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラビリンスで待つてて

【Nコード】

N6558N

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

高校生の玲の彼氏は24歳公務員の圭介。背が高く、ルックスも良くて、頭もいい彼氏を自慢できない訳があった。

圭介は玲の実の兄だったから。卒業を目前に将来を見出せない玲は、圭介との未来の無い関係にのめり込んでいくが・・・。

第1話（前書き）

タブーに敢えて挑戦！（^^）

嫌悪感を持たれた方はごめんなさい。
スルーしてっして下さいね。

女性に共感してもらえる恋愛小説にしたいです。
楽しんでいただけたら幸いです。

第1話

7月になったというのに、梅雨空の続く鬱陶しい時期だった。

湿気が多くて背中まで伸ばしたストレートヘアがベタベタ首筋に絡みつく。

不快指数は高いが、今夜は金曜日だ。

あたしのテンションはそれだけで上がった。

学校が終わって、コンビニのバイトが終わって、外はもう真っ暗だった。

店の裏に置いてある自転車に乗って、あたしは彼の待つマンションに向かう。

最近残業が増えた彼は、あたしがバイトが終わってから訪ねてもいないことが多い。

そういう時は合鍵で入れるのだけど、何となく後ろめたくてあたしはあんまり好きじゃない。

あたしは彼が待っているマンションに行くのが好きなんだ。

彼のマンションは道路を挟んで公園に面していて、夜 窓の外を見ると公園の外灯がロマンチックだ。

エレベーターがないのが残念だけど。

マンションの自転車置き場に駐輪して、あたしは3階の彼の部屋まで一気に駆け上がる。

ブザーを押して耳を澄ませていると、インターホンから彼の声が聞こえる。

この瞬間が好き。

「はい、高田です。」

「あたし、玲。」

鍵を開ける音がしてドアがゆっくり開いた。

「いらつしゃい、入って。」

彼の長い腕がドアを支えてる間に あたしはスルリと中に入り込む。

あたしを待つてくれた。

よりそう感じるから、あたしは彼がいる時に行く。

仕事から帰ったばかりなのか、圭介は白い開襟シャツにネクタイをぶら下げたままタバコをくわえている。

童顔な圭介は、もう24歳だというのに、こうして見るとまだ高校生みたいだ。

あたしのクラスの男の子のほうがもっと老けたのいるくらい。

すこし茶色がかったサラサラの髪は子供の頃からに地毛だ。

顔に似合わず背が高いし、学生時代陸上部で鍛えた体は引き締まってるあたし好みだ。

頭も良くて、有名大学に進学したが安定を求めて公務員になった。

まあ、女子高校生のあたしには 出来すぎた大人の彼氏だ。

ただ、一点を除いては。

あたしは乾いた洗濯物が散らばるソファにゴロリと寝転んだ。

洗濯物から彼の匂いがした。

「ごめん、今帰ったとこ。弁当買ったけど一緒に食べる？」

「食べる。お腹減ってるし。」

圭介はコンビニのレジ袋の中から海苔弁当とカツ弁当をダイニングキッチンの小さなテーブルに並べて自分はビールを開けて一口飲んだ。

「あたしも一口！」

「未成年はダメだ。この不良娘。」

ビール缶を奪いかけたあたしの手に、ウーロン茶の缶を握らせた。

ちいさなテーブルに向かい合ってあたしと圭介は弁当を食べ始めた。

「圭介、最近遅いね。」

「時期的にね。来週はもう楽だけど。お前は最近どう？」

「別に。普通。」

「・・・高校3年生ってやることないのか？受験勉強とか。」

「あたし大学行かないから。」

「で、どーすんだよ？」

「圭介のどこ永久就職したい。」

圭介の箸が止まった。

眉間にしわ寄せて、あたしの顔を見つめた。

あたしも真っ直ぐ見つめ返す。

「あのさ……。オレたち……。」

低い声の先を遮るように、あたしは あははは……と笑ってみせた。

「冗談だって。ごめん。」

圭介は返事をせずに、ビールをゴクゴク喉を鳴らして飲んだ。

あ、困らせたかな？

あたしたちの会話に未来の話はタブーなのだ。

「ごめん。怒った？」

あたしはテーブルを押しつけて、椅子に座ってる圭介の膝の上に向かい合って座った。

両腕を回して圭介の首を抱きしめる。

彼の形のいい唇に自分の唇を押し当てた。

舌の先でそつと唇を舐める。

それに応えるように圭介は あたしの体を抱き締めた。

彼の唇から今飲んだビールの味がした。

「好きだよ、圭介。」

あたしは彼の唇を優しく噛んだ。

圭介はいつもこんな時、嬉しいような、悲しいような、困ったような、笑みを浮かべる。

あたしはこの顔が好きで、もっと困らせたくなくなってしまふ。

「ねえ・・・、お願い。」

耳たぶを唇で噛みながら、あたしは圭介の耳元に囁く。

彼は返事の代わりに、あたしの制服の開襟シャツのボタンを外し始めた。

大きな冷たい彼の両手が、あたしのはだけたシャツの中に侵入し、ブラが外れる。

圭介は突然、あたしの頭を引き寄せ激しくキスを始めた。

唇を食った後、首筋に舌を這わせ、あたしの両胸にキスを繰り返した。

あたしは思わず声を出しそうになり、圭介の頭を抱きしめる。
子供の頃から変らない、柔らかい髪だ。

シトラス系の整髪剤の香りに混じって、タバコの匂いがした。

「あ・・・圭介・・・」

「あんまり挑発すんなよ。玲。」

圭介は荒い息をしながら、低い声で言った。

「オレは仮にもお前のお兄さんだからな。」

圭介はあたしのシャツを剥ぎ取り、裸にしてキスを降らし続ける。

「だから、これ以上はまずいでしょ……。」

圭介の低い声がすごく遠くに聞こえる。

あたしは快感と絶望で泣きながら圭介の愛撫に身を委ねる。

認めなくていけない真実。

あたしの自慢の彼氏 高田圭介は、あたしの本当の兄だった。

第2話

世の中にはゴマンと兄妹は存在するのに どうしてあたし達はこうなってしまったのか？

あたしなりに分析したことがある。

まず、彼が男で、6年離れて生まれたあたしが女だったってこと。

圭介が6歳の時にあたしが生まれた。

そしてあたしが小学校に上がる年に圭介は中高一貫制の全寮制男子校に入学してしまった。

女の子の体が著しく変る小学校の6年間と、男の子の体が変わる中高6年間をあたしたちは殆ど接触せずに過ごしてしまった。

もちろん、里帰りはしてたけど圭介はその頃 多感な反抗期で小学生の妹のことなんか鼻にもかけてなかった。

最終的に志望大学が実家の近くになったので、彼は19歳になった時 家に戻った。

その時あたしが13歳。

中学生になったばかりの多感な年頃だ。

6年ぶりに突然家に戻ってきた茶髪の男は、あたしが覚えていた丸刈りの少年とどうしてもリンクしなかった。

圭介も家を出るときにはピカピカの一年生だったあたしが、帰ったときには生理も始まって成長が止まってるんだから、びっくりしたことだろう。

でも、6歳だった圭介はあたしが生まれたときのことをはっきり覚えてる。

あたしがおむつ履いてたとき、おっぱい飲んでた時、みんな知っている。

SEXの時、圭介の方が自制心が働くのは多分そのせいだ。

.....

始まりはホントにくだらないうことからだった。

あたしが中学2年の時、くだらない女の子グループがいた。

いわゆるいじめられっ子の 真里菜って子が隣のクラスの男の子と付き合いだした。

女子の標的にされるだけあって、男子にはモテモテの子だった。

女子グループはその真里菜を取り囲んで、部活の帰りにキスしてたとか、してないとか、嫌がる真里菜に詰め寄って、聞き出すたびに大声で笑っている。

何が可笑しいのか意味が分からなかった。

あたしはバカが大嫌い。

あたしはその輪に割って入って、通り抜ける際にこう言った。

「バカみたい。たかがキスくらいで。子供じゃないんだから騒ぐほどのことじゃないのに。」

呆気にとられる連中を尻目に、あたしは髪をなびかせその場を去った。

困ったのはその後だった。

真里菜が走って追いかけてきたのだ。

「高田さん、ありがとう。嬉しかった。」

真里菜はかわいい顔に涙を浮かべてあたしの手を握った。

あたしはクールにこう言った。

「あんたも好きな男とキスしてたんなら、自信持って堂々としてなよ。」

真里菜は感動して、目をうるうるさせた。

「そうね、あたしは彼が好きなんだもん。ありがと。これからも相談に乗ってくれる？」

どうやらあたしのことを経験豊富な姉御にしてしまったらしい。

それからというもの、日々エスカレートしていく真里菜の体験談を毎日聞かされる羽目になってしまった。

こうなると今更「キスしたことありません。」とは言えない。

経験もないのに空想で返事をするには限界がきていた。

あたしは何とか既成事実を作ろうと焦り始めた。

そして家にいた 当時二十歳の圭介にターゲットを絞った。

.....

家に帰ると大きなスニーカーが玄関にあった。

ラッキー。

圭介のやつ、家にいるな。

あたしは何故か忍び足で階段を登って圭介の部屋に向かった。

ドンドンとノックしてみるが、中からは返事がなかった。

あたしは勝手に入り込んだ。

圭介はあたしに背を向けた姿勢で座っている。

ヘッドホンをしてエレキギターを弾いていた。

なんだ、それでノックが聞こえないんだ。

あたしは無遠慮に彼の頭からヘッドホンを剥ぎ取った。

圭介は本気でびっくりして、ギターを抱えたままひっくり返った。

「な、なんだよ。勝手に入ってくんなよ。」

「お兄ちゃんにお願いがある。」

あたしは圭介に詰め寄る。

「な、何？」

あたしの顔があんまり切羽詰まっていたのか、圭介の顔に恐怖さえ浮かんだ。

「キスして。」

あたしは単刀直入に言い切った。

「は？」

圭介は話が飲み込めない。

「困ってるの。早くキスしないと困ったことになるの。何でもいいからして！」

あたしはギターを抱きかかえて転がってる圭介に襲い掛かった。

「ま、待て。意味分かんない。落ち着けて。」

圭介はギターを盾にして、馬乗りになったあたしを足で引き離れた。

「キスしたいのは分かった。でも、せめて説明しろ。」

あたしはしぶしぶ一連の出来事を話した。

聞き終わった圭介は心底呆れた顔で言った。

「おまえら学校で何やってんの？」

「いいじゃん。もう話したでしょ。協力してよ。」

あたしはブスツとして言った。

「こういうのって好きな男の子としたほうがいいんじゃない？」

「相手がいればお兄ちゃんに頼んでませんよーだ。」

あたしは更にむくれた。

圭介は苦笑した。

「ま、いつか。どのみちお前のファーストキスの相手はオレだからな。」

あたしはぎよつとする。

「は？何言ってるの？」

「覚えてない？お前が幼稚園行く時、いつもオレの口に行ってきてますのチューしてくれてたじゃん。」

いつの話だ。

「もー！どうでもいいしそんなこと。するの？しないの？嫌ならお父さんに頼むしかないんだから。」

圭介はあはは・・・と笑って顔を近づけた。

唇の先であたしの唇にそつと触れる。

あたしは目を見開いて彼の顔を見た。

「これでいい？」

圭介が笑いながら聞いた。

早っ！なにそれ？

「いい訳ないじゃん。何そのテキトーなの。ちゃんとやってよ。」

あたしはブーブー文句を言った。

まだクスクス笑いながら、圭介は抱きしめていたギターをやっと床に置いた。

腕を回してあたしの頭をぐっと引き寄せ低い声で言った。

「後悔すんなよ。」

そして身動きが取れなくなつたあたしの唇に自分の唇を重ねた。

唇の先があたしの唇を優しく噛む。

しばらくそれを繰り返した後、だんだん腕に力が入り、彼の唇は乱暴にあたしの中に入ってきた。

彼の舌があたしの舌を絡めて、唾液があたしの唇を濡らした。

あたしは何をしたらいいのか分からなくてされるがままになっていた。

胸が締め付けられ、体が融けていくような感覚に、耐え切れず目を瞑った。

やがて彼は顔をゆっくり離した。

放心しているあたしの顔を見て、もう一度軽いキスをする。

彼の色素の薄い茶色の瞳があたしを見ていた。

「これでいい？」

「あ、はあ、ありがとうございます。」

あたしの間抜けな返事に圭介はまた笑った。

第3話

それから先はもう歯止めが利かなかった。

あたしは圭介のキスに夢中になり、二人きりになる度に彼に求めた。

彼の名誉の為に言っておくが、彼から誘ってきたことは一度もない。

求めるのは常にあたしで、それは今も変わっていない。

やっぱり彼のほうが兄の自覚があるんだろう。

.....

彼がまだ大学生でうちで一緒に住んでた時。

両親が床についた後、あたしは圭介の部屋にそつと忍び込む。

大体、圭介はTシャツにトランクスのままギターを弾いているか、パソコンで論文書いているか、ネットで遊んでいるか、マンガ読んでいるかだった。

大学生って暇なんだ。

あたしは音を立てないように背中を向けてギターを弾いてる圭介に後ろから巻きつく。

それがいつもの合図だった。

あたしは胸を彼の背中にぴったり押し付けて、耳たぶを噛む。

「・・・ねえ、圭介・・・。」

そんな時、彼は嬉しいような悲しいような、困ったような、あの不思議な笑みを浮かべる。

あたしはギターを取り上げ、彼の膝に馬乗りになると、自分から唇を求めに行く。

「・・・お兄ちゃんて言えよ。玲。」

あたしのキスを受け止めながら、優しく言っのがあたしにはせつない。

それを言わすことで、あたしに理性をもたせようとしてるのはみえみえだった。

あたしは少しムっとして彼の手を取って自分のシャツの中に誘導する。

最初は戸惑っていた彼の手が、やがて意志を持って動き出す。

あたしはもう片方の手を彼のトランクスの中に突っ込む。

途端、圭介の息遣いが荒くなる。

彼の色素の薄い瞳が熱っぽく潤んでくる。

「・・・玲・・・」

圭介は訴えるような声であたしの名を呼んだ。

こうなったらあたしの勝ちだ。

「なに？お兄ちゃん」

嬉しくなってあたしは意地悪な笑みを浮かべる。

はは・・・って圭介は笑って降参する。

「お兄ちゃんて呼ぶなよ。萎えるから。」

・・・
・・・

それから今まであたし達はどんどんエスカレートしていった。

が、最後の一線だけは圭介は越えてくれない。

お互いに満足するまでなんでもやるんだけど、まだひとつになったことは無いのだ。

圭介の理性が若干残っている証拠だ。

ここまで何でもやってたら今更・・・なんだけど、圭介はそこだけは越えたくないらしい。

だから逆に最後の行為以外は何でもやってみた。

不思議なことにリミットがつけられると、人はより燃えるらしい。

禁忌を犯しているという後ろめたさと、罪悪感、誰にも話せないという連帯感は、二人の絆を更に強めることになった。

- 全ての発端 -

現在に至るまで続くこのドロ沼は、あの日のキスから始まったのだ。
った。

あの時の圭介のキスがつまんなかったら、今こっという関係にはならなかっただろう。

だから、あたしはいつも思う。

「圭介は今までずっと男子校だったのに、どうしてキスが上手いの？」

「……今、オレが付き合った女の話聞きたい？」

圭介はあたしの口をキスで塞いだ。

聞いても何も感じなかっただろう。

あたしには血の繋がりという、どんな女にも負けない切り札があるのだから。

あたしは妹として、兄を愛する権利を神様から与えられてるんだもの。

第4話

あたし達は圭介のシングルベッドに横になっていた。

腕枕してもらって、あたしは彼の胸にぴったりと耳をつける。

こうすると彼の鼓動が頭に響く気がするのだ。

ちょうど、ヘッドホンから聞こえる音楽が頭の中で流れているみたい聞こえるあの感じ。

圭介のもう片方の手はあたしの体をまだ弄んでいる。

くすぐったくて、あたしはその手を掴まえてそつと噛んだ。

「・・・って・・・」

少し笑って圭介はあたしの両腕を掴まえ、あたしの頭の上で押さえつけた。

両腕の自由を奪われたあたしの唇にまたキスをする。

忘れることのできない体が溶けるようなこの感覚。

あたしは胸が締め付けられるような幸福感を味わいながら圭介に身を任す。

でも、この夜の圭介はいつもと違った。

いつもの優しい顔に、悲しいような、困ったようなあの表情が浮かぶ。

色素の薄い茶色の瞳であたしを見つめて、思い切ったように言った。

「ねえ、玲。」

「え？」

「お前いつまでこの関係続けたい？」

「は？」

あたしは露骨に嫌な顔をした。

不倫してる男女みたいなチープなセリフ。

一番圭介の口から聞きたくない、そしていつか聞かされるだろうと恐れていたセリフだ。

圭介は覚悟を決めていたようにゆっくり話し出した。

「オレは男だからいいけど、やっぱり玲には普通の結婚して欲しい。」

「・・・普通って何？結婚なんてしたくないし。」

「じゃ、結婚しないで仕事に生きる？進路も決めてないのに？」

「・・・・・・・・。」

担任の先生みたいに痛いところ付いてくる。

あたしは言い返せなくて圭介をただ睨んだ。

圭介は優しい顔のまま更に残酷なことを続けて言った。

「オレとは戸籍上できないよ。子供もつくれない。おかあさんにだ
って言えないし。・・・てか、誰にも言えないよね。バレたら二人と
も変態扱いされるし、オレは犯罪者だな。これってAVだと近親相
姦モノって言うて・・・。」

「やめてよ！！」

あたしは思わず大声を出した。

もう勝手に涙が溢れてくる。

「そ、そんなこと言われなくても、さ、最初から分かってる。なん
で意地悪言うの？」

「オレがお前をダメにしてるって思ったから。」

圭介は優しい顔のまま静かに言った。

「このままダラダラ付き合っても出口がない。でも未来もないけど、終わりもないじゃん。オレは玲が結婚もしないで、仕事もしないで、どんだん年取ってくのは良くないと思う。」

あたしは沈黙していた。

「オレは昔から意志が弱くて流されちゃう人間だから、ここまで来ちゃったけど。どこで終わらせたらいいのかきつかけもなくて……。でも、玲が卒業しても、あのコンビニでバイトしながらまだここに通ってたなら、オレのせいだ。それだけは避けたい。」

「……それって別れたいってこと？」

圭介は苦笑した。

「お前とは別れられないよ。妹だからな。でも、お前が普通のヤツと付き合って、結婚するなら……。」

圭介が言い終わる前にあたしの平手が飛んだ。

「偉そうに言わないでよ！何だかんだ言って、面倒な女と付き合うのが嫌になったんでしょ？変態はお互い様じゃない。今更、見え透いたこと言わないで……。嫌いになったんならそう言って……。」

ボロボロ涙が落ちてくる。

もうあたしの感情は暴走してしまって止めようもなかった。

「玲、落ち着いて聞いて。」

「は、離して！要するに変態プレーに飽きたんでしょ？もう、無理しないで・・・。」

暴れるあたしを圭介はものすごい力で抱きすくめた。

あたしの顔に圭介の顔がぴったりくつき、耳元で低い声がした。

「嫌いな訳ない。好きだから言ってる。でも、玲は妹なんだから幸せになってもらわないと困るんだ。」

「なんで・・・？なんで圭介と一緒にじゃ幸せになれないの？」

もはやあたしは子供のようにわあわあ泣き出していた。

圭介は黙ってあたしの髪をなでていた。

顔は見えなかったけど、彼も泣いていることは分かっていた。

終わりのない迷宮。

あたしは出口なんか求めてなかったのに。

このまま二人でいつまでも迷宮で暮らしていたかった。

でも、そこから最初に出ようとしていたのは圭介だった。

第五話

圭介が突然、終わりを示唆したあの夜。

あの夜の彼の真意を知ったのはそれから1週間後のことだった。

当然ながらあの夜から圭介のマンションには行っていなかった。

バイトが終わって家に帰ると、おかあさんが玄関の自宅電話で話をしている。

その相手が圭介なのはおかあさんの話の口調ですぐ分かった。

あたしはドキッとして思わず聞き耳を立てて玄関先に座り込んだ。

「まあ、とりあえずおめでとうね。自分で決めた道なんだから頑張るしかないわね。……ええ……分かった……。取りに来るのね……。はいはい……。じゃあね。」

おかあさんが電話を切った。

あたしは嫌な予感がしておかあさんに詰め寄る。

「ねえ、今のおにいちゃん？何だって？」

「あら、玲。おかえり。最近早いじゃない。バイトは・・・」

「そんなことより、何だったの？」

あたし達のこと何も知らないおかあさんは呑気に笑いながら一通の封書を見せた。

採用通知

株式会社 ワールドトレーディング

海外事業部 現地駐在員採用係

高田圭介殿

貴殿の採用が決定しました。

つきましては下記日程の事前オリエンテーションに参加することを・
・・

「・・・何これ？どっかの会社？現地駐在員って・・・？」

あたしの胸はドキドキ鳴り始めた。

まさかこれって・・・。

「採用通知よ。あの子ったら、せっかく働いてる市役所辞めるらしいの。来年の四月からこの会社に入社するんだって。でも、仕事しながら就職活動してたなんて知らなかったわね。」

就職活動？

あたしも聞いてない。

おかあさんは呑気に続ける。

「あの子、昔から外国で仕事したかったから夢が叶って良かったじゃない。市役所辞めちゃうのはもったいないけど。なんか世界中に支店がある商社みたいよ。」

仕事辞める？

あのマンションからいなくなるの？

でも、圭介の夢なんてあたしは初めて聞いた。

「おかあさん知ってたの？いつ圭介が外国行きたいって言ってたの？」

おかあさんはあたしの質問にびっくりした顔をする。

「あんた知らなかったの？6年間の男子校はあの子が行きたいって言い出したのよ。学校の公用語が英語で留学生も多いからインターナショナルスクールみたいなんだって。そこで英語の勉強したいって。将来は海外で働くからって6年生の子が言うんだから。」

そんなこと知るわけない。

その時あたしは6歳の筈だ。

おかあさんは遠い目をして続ける。

「中高で学費がかかったから大学だけは自宅から通える国立にしたのよ。それも自分で決めて。しかも卒業したら海外に行くっていったの。だから大学生になってから、地元で公務員になるって言い出した時のほうがびっくりだったわ。」

あたしは胸が締め付けられた。

心臓がときどき鳴っている。

大学の時ってあたし達が関係を持ち始めた時だ。

子供の頃からの夢を圭介は突然諦めた。

それってもしかして・・・あたしのせい？

「また通知取りに来るって。あんたも入ってご飯食べなさい。」

おかあさんは呆然としているあたしを置いてさっさと奥に入ってしまった。

兄の転職にこんなにショックを受けるとは思ってもないだろう。

あたしは力が抜けて玄関にへたり込んだ。

「オレがお前をダメにしてると思ったから。」

あの夜の圭介の言葉を思い出した。

でも、違う。

圭介を迷宮に引き釣り込んでダメにしたのはあたしだ。

優しい圭介は兄としての責任を感じてたんだろう。

夢を諦めてもあたしの傍にすることに決めたに違いない。

でも、それがあたしの為になってないって思って、あたしから離れる道を探してた。

自分が先に迷宮から出なければって思ったんだろう。

血が繋がってるからか、愛し合ってるからなのか分からない。

圭介の思考回路が手に取るように見えた。

「……あたしどうしたらいい？」

座り込んだままあたしは呟いた。

第6話

梅雨も完全に明けて時は7月も半ばになっていた。

圭介とはあれから逢っていない。

どんな顔をしてあつたらいいのか分からなかった。

あたしのせいで圭介が辛い選択をしたんじゃないかって思うと申し訳ない気がした。

でも、だからと言って圭介がいない世の中をあたしは生きていけそうになかった。

周りは受験勉強、進路指導、学校見学と高校三年生らしく受験モード一色に染まって行く。

あたしは圭介にも置いていかれ、学校の競争社会にも順応できず、ぼんやりと過ごしていた。

蝉の声がだんだんと激しくなってくる。

夏もこれから本番だ。

これから進路相談もあるのだが、卒業後、何をしようとか、どこに

あたしの世界は圭介と過ごしたあの迷宮の中にしかなかったから。

[illegible]

夕方になったというのに全く風がなかった。

明日から期末のテスト週間が始まるというのに、友達に借りたノートを机の中に忘れてきたのだ。

だが、ノートは返さなければならぬため、どうしても取りに行かなければならない。

テスト週間が始まるせいか、薄暗い校舎には誰も見当たらなかった。

3年5組の教室に向かってあたしは暗い廊下を進んだ。

現実主義のあたしでも、夜の学校は不気味だ。

さっさと帰ろう。

そう思って教室に勢いよく入ると、窓辺に黒い人影が動いた。

「きゃっ！！！！」

あたしが思わず悲鳴を上げると、人影もびっくりして飛び上がった。

「た、高田さん？」

人影が喋った。

背の高いがっちりしたシルエットだがそれは同じクラスの子、松山さんだった。

「松山さん？こんな時間に何してんの？」

あたしはほっとして教室に入り彼女に話しかけた。

教室の中は昼間の熱気でサウナの中みたいだ。

松山さんはショートヘアをガシガシとタオルで拭いた。

「何って、今まで部活だったし、ちょっと寄っただけ。」

そういわれて思い出した。

松山さんは陸上部で結構有名な選手らしい。

長い足は褐色に日焼けしてスラリと伸びている。

野性的な顔立ちに今時珍しいショートヘアが良く似合っていた。

あたしとは対極にいる熱血女子高生だ。

「まだ部活やってんの？受験生なの？」

あたしは自分のことは棚に上げて聞いてみた。

「今月の終わりに引退試合がある。そこでいい成績出たらT大学の体育学部におすすめで入れる。あたしはその大学で陸上続けて、箱根駅伝に出たいんだ。」

松山さんは日焼けした顔に白い歯を見せてにっこり笑った。

あたしは何か違和感を感じた。

「この人こんなにきれいだったっけ？」

「走るの好きなんだね。でも、そしたらどうするの？」

あたしはこの人の人生観に興味が出てきて続けて聞いた。

「大学でいい成績がでたら実業団に入って陸上を続ける。だめだったら体育教師になって、陸上部の顧問になる。それもダメなら陸上部がある企業に入ってまた走る。」

松山さんはもう決まっているかのようにサラサラ答えた。

「走ってばかりだね。」

あたしは単純な彼女の思考が気に入って少し笑った。

こんなに好きなものがあたしにもあればどんなにいいだろう。

松山さんは窓を開けた。

僅かだが外の空気が入り、あたしの長い髪が揺れた。

松山さんは顔を風に当てながら、窓の外を遠い目で見て言った。

「あたし約束したんだよね。彼がいつ戻ってきててもカッコよく走ってるって。」

あたしはぎよつとして松山さんを凝視した。

彼氏がいるようには失礼ながら見えなかったから……。

「陸上部の人と付き合ってるの?」

あたしは恐る恐る聞いた。

「付き合っていないから、名前は言えないよ。彼にふさわしい女になってからでないと悪いじゃん。あいつがいつ戻ってきててもカッコよくいたいから、あたしはいつも走ってる。」

松山さんはあははと笑った。

その笑顔はとってもきれいだ。

あたしは何故かこの人に話しをしたくなった。

「あたしの好きな人は、あたしを置いて遠いところに行く気なの。あたしはあの人がいなくなったらもう生きていけなくて……今でも一人じゃ何にもできなくて……。でも、あたしのためにもう夢を諦めて欲しくないの……。」

あたしはポツポツ話しながら気が付いたらまた涙がこぼれていた。

松山さんはびくりした顔をしてたけど、何も言わずに聞いていた。

「あたし、一人じゃだめなの。ずっと一緒にいたかったのに・・・。」

松山さんは黙って聞いた後、静かに言った。

「好きなら追いかければいいじゃん？頑張っていい女でいればチャンスはあるよ。でも、今のグダグダした感じはかっこよくない。」

あたしは顔を上げた。

追っかける・・・？

「あたしもあいつのこと追っかけてる。頑張ってるあいつに負けたくないからいつも走ってる。でも、同じゴール目指してたらいつか一緒に走れると思うてる。」

松山さんは続けた。

「高田さんがその人のこと好きなら、自分の道見つけて頑張ればいい。彼が戻ってきた時に付き合いたいと思われるようにさ。その時ぐうたらの中年おばさんになってたら、嫌じゃん？」

あたしは首を縦に振った。

そうだ、圭介はいつも頑張ってたんだ。

子供の時は自分の夢の為に、あたしと会ってからあたしの為に・・

黙り込んだあたしの肩を松山さんは叩いた。

サロンパスのようなメンソールの香りがした。

「お互い頑張ろう？　で、相手は誰？」

あたしは泣き笑いした。

「言えないの。だってあたし達も恋人じゃないんだもん。」

二人で真っ暗になった校舎を出た。

生暖かい空にぼんやりと月が出ている。

あたしは背の高い松山さんを見上げた。

「松山さんの名前なんだっけ？」

「美紀。あんたは？」

「玲。今日はありがと。なんか吹っ切れた。」

あたしは心から笑った。

「不倫はやめときなよ。」

なんか完全に勘違いしている松山さんはそう言って手を振ると、帰路についた。

あたしが今できること。

圭介に近づけること。

あたしは迷宮の出口が少し見えた気がした。

第6話（後書き）

時々自分で読み返すと誤字脱字が結構ありますね。

お恥ずかしい。

気が付けば直してますので更新が多いですがご理解お願いします。

第7話

時間を見た。

8時だ。

多分圭介は帰っている。

あたしは、携帯で圭介に電話をかけた。

「もしもし？玲？」

わずか2コールで圭介の声がした。

久しぶりに聞く懐かしい声にあたしはもう泣きたくなった。

「圭介？あたし・・・。」

「・・・元気だった？今どこ？」

あたしは大きく息を吸った。

そうしないと泣き出してしまいそうだった。

「圭介、おめでとう。来年から行くんでしょ？」

「・・・聞いた？ごめん。結果出てから言おうと思って・・・。」

「圭介が英語喋れたなんて知らなかったよ。」

「まあ、6年間寮で外人とルームシェアしてたから……。」

「あたしも頑張る。」

「えっ？」

涙を堪えながらあたしは言った。

「圭介に負けられないように頑張るから。あたしのこと心配しないで行ってきて。」

「何？急に。玲、今どこだよ？」

「しばらく逢わないよ。あたしが一人で頑張れるまで圭介と逢わない。」

しばらく圭介が沈黙した。

「……大丈夫か？」

「大丈夫。あたしが進路も決めてちゃんとしたら圭介逢ってくれる？」

「いつでも逢うよ。てかお前どうしたの？」

「あたし圭介のお荷物になりたくないの。だから自分の足で圭介を

追いかけることにしたの。」

「バカ、荷物なんて思ったことないって。オレはただ・・・。」

電話の向こうの圭介はかなり動揺していた。

あたしは思い切って言った。

「でも、あたしがちゃんとして、今度逢った時はお願いがあるの。」

「出たな。玲のお願い。何だよ？」

電話の向こうでクスクス笑うのが聞こえた。

思えばこの迷宮は初めてお願いしたキスから始まったことだった。

「一度でいいから妹じゃなくて普通の女の子と思って逢って欲しいの。」

「何言ってるんだよ、今更。最初から妹と思えないからこんなことになってるんだろ？」

「じゃあ、あたしのことホントに抱いて。あたしの中まで入ってきて。あたしとひとつになって。」

「・・・・・・・・。」

圭介が黙り込む。

「それを最後にあたし達終わろう。普通の兄妹に戻る？お願い。でないにあたし……。」

「……それって意味分かってる？今更だけど、初めての男が兄って……。」

あたしはとうとう泣き出した。

「兄だっと思ってたことなんか一度もないよ！圭介が家に戻ってきた時から、圭介は圭介だった。あたしが初めて好きになった男の人だったの。」

しばらくの沈黙の後、返事が返ってきた。

「……オレも。」

「え……？」

「初めてお前にお願いされてキスした時、あんまりかわいくて歯止めがかかんなくなった。あれからお前はただの女の子だったよ。」

「……ありがと……。」

あたしは携帯を握り締めて泣きじゃくっていた。

「なんか知らないけど、決心したなら頑張れ。勉強教えて欲しかったらいつでも来いよ。それで、春になったら別れる前に会おう。」

あたしはうんうんと頷いていた。

「その時は、お前もおにちゃんじゃなくて男に逢うつもりで覚悟して来いよ。」

電話の向こうで圭介が優しい顔で笑っているのが見えるみたいだった。

第8話

三月の終わりにしては暖かな日だった。

温暖化の影響か桜の蕾も綻びかけてもう三分咲になっている。

四月になって新しい生活が始まる頃には散っているだろう。

あたしはホテルのフレンチレストランの窓際の席に座って、ライトアップされている庭園を眺めた。

あれから、あたしは結局圭介に逢うことはなかった。

彼も連絡してこなかったし、いざ受験勉強を始めると、することがありすぎて毎日があつと言つ間に過ぎていった。

なんとか自分なりに進路を考え、行き先も決まった2月の終わりにあたしは圭介に電話をした。

圭介はこのホテルを指定して今日ここで待っているように言った。

八ヶ月ぶりの再会だ。

やがてウェイターに案内されて、大きな花束を抱えたスーツ姿の圭介が現れた。

「玲。久しぶり。元気だったか？」

圭介は屈託なく笑って、呆然とするあたしに花束を差し出した。

八ヶ月ぶりの圭介は少し痩せて、前より落ち着いた雰囲気だった。

あたしの大好きだった茶髪は自然に後ろに流れてセットされてて、黙ってたらここで働いてるウェイターみたいだ。

「あ、ありがとう・・・。」

あたしは花束を受け取ってその匂いをかいだ。

何だか恥ずかしくて真っ直ぐ顔を見られない。

あんなに逢いたかったのに、電話ではすごいこと要求してたのに、目の前に現れた圭介は知らない大人の男の人みたいで、あたしの視線は宙に浮いていた。

そんなあたしに気付かず、圭介は席について話し始めた。

「どうするの？進路？決まったって言ってたけど。」

「あ、ああ、進路ね。」

あたしは慌てて圭介を見上げた。

「あたし、K大の外国語学部いくことにした。スペイン語と英語専攻するの。」

「へえ、スペイン語？」

圭介は感心した顔をした。

「いいじゃん。うちの会社でも南米って取引多いよ。企業も現地で工場作ってるしさ。」

「・・・圭介はいつマンション出るの？」

「今月の最終日に全部まとめて引越しする。市役所の友達がトラック出してくれるんだ。」

あの公園を見下ろすマンションは、もうなくなってしまっのか・・・

あたしは何だか切なかった。

圭介は続けた。

「しばらくは東京の会社の寮から出勤するけど、多分研修期間終わったら7月にはアメリカに行く。そうしたらしばらくは日本に帰れない。」

「・・・そつか。」

あたしはか弱く笑った。

しばらく沈黙が続いた。

助け舟を出すかのように先ほどのウェイターが戻ってきて、二人分の前菜とワイングラスを持ってきた。

「とりあえず乾杯しようか？」

「うん。」

ウェイターは圭介にはワインを、あたしにはグレープジュースをグラスについて、うやうやしく礼をするとまた戻っていった。

「じゃあ、二人の前途に乾杯！」

「乾杯」

二人の前途ってなんだろうって思いながらあたしはジュースを一口飲んだ。

圭介も使い方を間違ったのに気付いて、きまづい顔でワインを飲んだ。

これって一緒に生きてく二人に贈る言葉。

今から別れるあたしたちには ふさわしくないだろう。

「玲、前電話で言ってたお願いだけど。」

圭介が突然言った。

あたしはビクっとして顔を上げた。

「・・・まだお願いしたい？」

「・・・。」

あたしは何が言いたいのかわからず圭介の顔を見つめる。

あたしに見つめられた圭介は顔を赤くして小さい声で言った。

「オレ、今日は普通の男のつもりなんだけど、もし玲がお兄ちゃんがいいならそれでもいい。」

「あ、あたしも。普通の女のつもりできたけど、圭介がどうしても妹がいいならそれでもいい。」

あたしたちは顔を見合わせた。

さすが血の繋がった兄妹なのか考えて出た答えは同じだった。

圭介と離れてた八カ月間、あたしは自分の人生も含めてこの関係を考えてた。

あたしにとって圭介はただの男以外に何者でもないのだ。

戸籍上、DNA上、世間体、色々問題があるのは仕方が無い。

だけど、それが嫌いになる理由にはならないし、他の人と結婚する理由には成り得ない。

あたしは圭介が好きなんだから。

だから彼があたしを女と見ようが、妹と見ようがどうしてもよくなってしまった。

あたしは、迷宮でいつまでも彼を待つ覚悟を決めた。

「オレさ、好きなのに無理に別れるのって不自然かなって思ったんだ。オレはお前が好きだから、おにいちゃんでも、圭介でももう何でもいいよ。ドロ沼って言われようがオレはお前のこと待ってる。」

早口で圭介は言った。

ドロ沼か。

あたしが迷宮って呼んでたこの関係は、センスの無い男にはこうなってしまう。

あたしは苦笑した。

あたしを見て圭介は赤面する。

「な、なんかおかしい？」

「おかしいよ。あたしも同じこと考えてたんだもん。」

「じゃ、じゃあ改めて。」

圭介はネクタイを締めなおして、髪を掻き揚げた。

「高田玲さん。今夜はオレの女でお願いします。」

「は、はい。」

あたしは嬉しくて、幸せで、溢れてきた涙で前が見えなくなった。

第9話

八ヶ月ぶりに戻った圭介のマンションは、もう引越しの準備が始まっていて、大きなダンボールが積み上げられている。

窓辺に置かれたシングルベッドだけがまだそのままだった。

圭介は鍵をかけると、ネクタイを外した。

あたしは彼に近づき、開襟シャツのボタンを外し始める。

圭介の素肌が顕わになり、あたしは彼の胸に触れた。

温かくて滑らかな皮膚の下に激しい鼓動を感じる。

彼の長い両腕はあたしを抱きしめ、ワンピースの背中のファスナーが下げられていく。

圭介の顔が近づき、あたしの唇を貪り始める。

ワンピースがストンと足元に落ちた。

彼は裸になったあたしの体を乱暴に抱き上げるとベッドに寝かせた。

激しいキスが体中に撒き散らされる。

両手であたしの小さな胸を弄びながら先端の敏感な部分を噛んだ。

あたしは痛みと快感で思わず大声をだしそうになり、必死で枕を握り締めていた。

「け、圭介・・・今日はなんか・・・違うみたい・・・。」

あたしは喘ぎながら囁く。

彼は荒い息をしながら少し笑った。

「ごめん。今日は妹じゃないから、悪いけど遠慮したくない。文句があつたら後で何でも聞くから・・・。」

圭介はあたしの両足を強引に開くと、その敏感な部分にも長いキスをした。

あたしの体は彼の舌が動く度に、痙攣したようにビクビク震えた。

体が溶けそうな感覚に我慢できず、あたしは泣き出す。

やがて彼の顔があたしの顔に近づいた。

あたしの好きな色素の薄い瞳は熱があるみたいに潤んでいる。

さっきまでセツトされてた髪は乱れて額にかかってセクシーだ。

あたしの泣き顔を優しい顔で見つめた後、低い声で懇願するように圭介は聞いた。

「オレの女になってくれる？玲」

その声が、優しく、切なくて、でもあたしは嬉しくて、泣きながら笑って頷いた。

それを聞いて、彼もにっこり笑うとあたしの頭を抱きしめた。

そして体が裂けるような痛みと、気が遠くなるような快感、味わったことのない幸福感があたしを襲った。

叫びだしそうなあたしの口を彼のキスが塞いだ。

あたしの腕は圭介の背中を這い、しがみつく度に爪の後を残した。

「好きだよ・・・玲・・・ずっと前から・・・。」

喘ぎながら、圭介はあたしの耳元で何回も囁いた。

あたしは快感に身を委ねてただ泣くしかなかった。

あたしたちは迷宮に閉じ込められてしまったかもしれない。

この迷宮は普通の人より障害も多くて、辛いこともあるだろう。

あたしたちの迷宮は誰にも知られてはならないのだから。

でも、もう出口を探すのはやめた。

あたしも、圭介も生きる道は違っても、いつもお互いを迷宮で待っている。

疲れた時、行き詰った時、いつでも帰って来れるように。

第9話（後書き）

次回最終回です。

第10話 最終回

久しぶりの日本だ。

あたしは名古屋空港のロビーで荷物が流れてくるのを待っていた。

国際便があるにはここじんまりした空港だ。

次の仕事来るまで、この街にお世話になりそうだ。

あたしは卒業後、旅行会社に入社しツアーコンダクターの仕事をしている。

半月は24時間体制で働いて、後の半年は何もしないで過ごす。

若い頃は人気の業種だが、この生活リズムが既婚者にはなかなかできなくて辞めていく人が多い。

結婚もしなくて子供もいない、定住しないあたしには打って付けの仕事だった。

彼も転勤族なので、今は2週間おきに東南アジアと名古屋を往復している。

幸か不幸かこんな生活では嫁も来ない。

だから仕事がオフのときのあたしの仮住まいは、その時々彼の居住地になる。

あたしは30歳になっていた。

そろそろ結婚しなさいと、親がうるさい年頃だが、仕事を優先しているということでおさめている。

必ずしも嘘ではなくて、あたしは今のライフスタイルが気に入っていた。

最近、高校の時の松山サンから結婚の知らせがきた。

結婚式の写真がプリントされた葉書だった。

真っ黒に日に焼けてた女子高生は見違えるようにきれいになって白いドレスで笑っている。

相手の新郎の顔になんか見覚えがあって、あたしは首を傾げた。

あれ？この人。

途中で、転校してった隣のクラスの子じゃない？

青白い顔でビン底眼鏡をしていたが、すっかり男らしくなっている。

なんだ、やっぱり付き合ってたんだ。

あたしは少し笑った。

良かったね。

お幸せに。

やがて荷物が流れてくるとあたしは引き釣り下ろして、出口に向かった。

飛行機の到着時間は連絡してあるから、待っていてくれるはずだ。

人の波に流されながらあたしは彼の姿を探す。

「玲!」

懐かしい声がした。

海外生活で日に焼けた褐色の肌に、茶色の髪、色素の薄い瞳。

海外の露店で買ったであろうHard Rock Cafeってロゴの入った変な黒いTシャツを着ている。

まるで夜店でシルバーの指輪売ってる外国人みたいだ。

その男が人目も憚らず大きく手を振っている。

男も36歳になると周りの目が気にならなくなるのか。

「どんどん、なり振り構わなくなってくるなあ……。」

あたしは若干恥ずかしさを覚えて、首をすくめた。

彼は出口から出てきたあたしの荷物を奪い取るなり、待ちきれない様にあたしを抱きしめた。

「おかえり、玲。」

「ただいま、圭介。」

日焼けした彼の笑顔が眩しかった。

今回は1ヶ月くらいは一緒にいられるかな？

圭介のキスを受け止めながらあたしは考えていた。

結局、あたしたちは今でも迷宮の中にいる。

無理して二人でこうしているわけではなく、お互い他に相手がいなかったなので、結果的にこうなってしまった。

DNAとか戸籍とか、色々考えたけど、地元を離ればそんなことは関係なかった。

見知らぬ土地に行って夫婦に間違われても、面倒なので否定もしないし、する必要もなかった。

あたし達が定住しないのは仕事の問題もあるけど、身軽さが心地良
いせいでもあった。

外に出ると、6月の日本の湿気がむっと体を包んだ。

「ねえ、圭介。」

「ん？」

あたしは圭介を見上げて言う。

「あたしのこと待ってた？」

「いつも待ってるよ。」

圭介はいつもの優しい顔で笑った。

初夏の街路樹の緑が日に照らされてきらめいた。

< 完 >

第10話 最終回（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

お疲れ様でした。

気に入って頂けましたら幸いです。

感想なども頂けたら嬉しいので、お暇があればよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6558n/>

ラビリンスで待ってて

2010年10月17日05時44分発行